さ[illegible]く[illegible]あり[illegible]は[illegible]成[illegible]菊[illegible]表
ねべ[illegible]ありだ[illegible]乃[illegible]情を
乃[illegible]小田を[illegible]あ[illegible]水口[illegible]
見て[illegible]ば[illegible]ら[illegible]誠[illegible]信心乃
[illegible]色あり[illegible]乃[illegible]は[illegible]御神田
[illegible]春乃田を作[illegible]
とて[illegible]つ[illegible]と[illegible]乃[illegible]
あ[illegible]乃[illegible]とて[illegible]十乃[illegible]
て[illegible]を[illegible]く神[illegible]を[illegible]
あ[illegible]奇[illegible]谷水[illegible]せく水口[illegible]
い[illegible]く[illegible]首代小田乃穂[illegible]
[illegible]長[illegible]御田[illegible]當社[illegible]
宮乃[illegible]田[illegible]
[illegible]御田[illegible]

[illegible]伝[illegible]社二乃宮[illegible]
[illegible]乃一[illegible]は[illegible]
[illegible]や[illegible]乃[illegible]現[illegible]
[illegible]
く[illegible]心[illegible]
[illegible]社[illegible]二乃
[illegible]
二乃[illegible]
[illegible]社乃[illegible]
[illegible]乃宮[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ほだの種をひろまるく天ばら恐慌
ばれ神の恵ひろまり　変新ば
ば後ろの出世界や万物の出生あ
ばきこの神徳ばは是両社の恵を
弘きべ為まり天地のいさるさ
とうのてへ為まるとろいさ
まことのてへ為まるとろいを是
目前の恵ひし恵ひし恵よ神代へたろ
らべ今目あるも　種
をまれ種を納めるく苗代のく
水うらうく雲雨のあ為ばより
きろうまきてばは出と出ろまる
是ばところのとろの恵の
秋よまるなるへ種を納めん神徳

豆有縁の恵ばれるとろの社のち
うひ屋まる　社の神秘慰よ
ばれるとへ　変天地開闢の首より
ばんどんばんやくまるまて清く
ばるるばは天しまるばるとく清る
地しまるまり　弘きは天より五
行の神海まんぞ人出金水是
まるば陰陽あひ別きるく変
出の儲いさるさしまるべ金水の儲
まるうまりていけ為ことまる
弘きたいまる世界たまるさし
ていけまるさしまるばは出出ばまり
抜出まるるばいけ為ことしを
則神徳ばは出と弱あと流りるし

むかしや二柱乃神たちおのごろ嶋と
申をせ一物ありしより化し給
ひて大八嶋を生み給ひて乃国
伊勢志摩日向并み西乃海岸
を作り出日神月神蛭子その
乃ちにや地神五代乃始めよく
皆此嶋よ出現給ふも皇孫が日
向乃国み天降りまして地神第四
乃御すてそれ御子とぞ出生有義
千代くしらや天下をてもち給ふ
事すべて八十三万六千八百余歳
しかも日出る王子達の御代をゆ
ひり城乃権現と現はれ
げるさいざるこの神代も日本今の

ぼ去がへし実神乃代の道直く
今ておかが秋津洲乃君乃が影ぞ右
がるきれ影ぞとも日かげも乃雲
乃始め君あひしあまの浮橋の跡
を移りてはまなべてあさしらん
それ浮橋乃いはへしのゝめの
玄の娘乃　男神哥ハ鳥羽玉乃我
黒髪を　乱れみ諸ひ定めよ何
よの手枕乃新手よまきて神
とハまつる荒淡路山をうごさ
えて天乃やうを渡り来きまりく
家としても神乃世恵く後末は
あらゝありきりといへぬ虚空よ
夜神楽乃ぞへて月を見て気

色ぞ一つに成りぬるやきらきらぞの
らゝありまるるづゝ乃のざよ
浮せる白玉乃波とてゆく淡路嶋
月雲乃ふを長宗なる縁のこともす
見渡すあまの浮橋君よまさくば
鶺鴒乃道を求めえいざなぎ乃神
とハ我なりと治まりや常立尊
始めより七代乃神の代君
國まさしる今の君乃代ぞさき和光
豊神乃枝葉乃國国にまで風ハ吹けど
山ハ動かず実有りうるさき御夢
ざく千天乃浮橋乃豆いで出所は
せるまくもがた成所なるらん幽り
けげし祢乃きついだり留まりて

鶺鴒としまりし彼淡路よしと見てつきて
雲ぞ浮橋乃下なるらん実鶺鴒
乃有様東西の海共にくしとしまく
南北は雲風をさるゝ宮殿あり
うた浮橋を立渡りまふ雲の袖
きはかのこの手にもありけハ
し風乃時津風も治まる八段乃声
民乃ほ富民も君万歳をう
たふ君の声千秋の秋津嶋治
まるぞ久しく

放家僧

われは下野国乃住人牧野の左
衛門何某が子に小次郎と申者なり扨も
親にて候者ハ相模の住人に利根の信俊と
申者と口論し互に討れて親の敵
なくし候に討べきと存候へ共敵ハ猛勢にて
候ハ唯一人にて同じ思ひに甲斐なく
月日を送り候所に兄にて候者ハ幼少より出家
仕りて候今ハ會下にありて便もなく候
同じ立越へ談合をも申さばやと存候
案内申 〈シテ 誰にて渡り候ぞ 〈ワキ 某が参りて候
思て 〈シテ [illegible]
何の為に参り給ひて候ぞ 〈ワキ 別の子細
にて候 兄にて候へば親の敵の

さりながら今ハ母にて候へば敵は猛勢にて候を唯
一人にて候程に思ひに甲斐なき月日を
送り候 兼て覚え候へ共 〈ツレ 仰は
尤もにて候へ共我らは幼少より出家の
身となりて候程に夢の世にて候 〈ワキ 御意ハ
さる事にて候へ共親の敵を討たぬは不孝
の由にて候 〈シテ 扨は親の敵を討つは孝の道
にて候へば 〈ワキ 中にも唐土の例や
其の身母の墓にて虎に取られしを歎きて
ある日野辺に出て [illegible]
たる石を虎に似たりと思ひて射る
[illegible] 放つ矢則ち石に立つ
流れも[illegible]孝の心深きによつて

咄さしたる事にも大の字で申し山へ入るものにて候へば立入
シテ「是は面白き事を承り候ものかな　只今もこれに参りて候
法をよく思ひたてまつれ　ワキ「御身は
シテ「桜枝太子は行じても極楽の台　ワキ「某も
在家に出でさせ給ふ人の教へは何と
家のうちに修行せば其は在家に成るべし出家は
教へ傳へに御坊の法は禅法にて候よな　シテ「さん候禅法にて候
と申すは仔細にも行きたる事にて候　シテ「実
是は面白き御事にて候　げにげに仏法の思はる
ずるにて候　ワキ「それは目出たくこそ候へ
たうとき御法にて候ものを　ワキ「神や仏
思へば放家の人にも出で給ふ
くさ　シテ「立ち出でて　古郷の空を心ざしける
有明の月も　つれなく見えしいつの名残かな

限りもなき心の中でやすらかに歩みを
でさるる神道やく隣の松に頼もしき
見るは相模の国の住人　利根の信俊とや去る
おしはかり候へと申すものを　かの信俊に
隔てれ二場へ参らむとしたまひし　シテ「面白の
神も宿れやお僧俗からの道の道に尋ね来
ぞとぞ見ゆる人の姿　地「其の放下の隠れ家
と思ひ捨てしを　シテ「去りてすずしき
来てみれば　紅葉の錦の衣手に白雲
書山に遊ぶところ　地「嵐の山に秋の来て
紅葉をあかす紅葉の錦も時雨の雨に
さは世は日の暮れ入りて夕べの露の置き所
やあらむ世に古への水の上のたはぶれ
いつとなく思ひの色をしのぶ　地「めぐる

[illegible]名に行とやいふ。浮雲流水と申は[illegible]人の名とかけり。[illegible]雲衆と申は[illegible]いや其は浮雲[illegible]成者は流水なり。[illegible]成は方の[illegible]宿を行とやいふ。[illegible]いやくなり。[illegible]故なり。[illegible]いたづらなる。[illegible]なり。[illegible]なり。[illegible]千力の珠数を手に纏ひ[illegible]摩二体の[illegible]羅漢[illegible]の袈裟を掛て社傳に申[illegible]敷[illegible]出[illegible]得[illegible]見[illegible]指[illegible]国[illegible]。[illegible]国[illegible]申[illegible]動く時は[illegible]清[illegible]時は月[illegible]風[illegible]同性[illegible]法[illegible]

[illegible]宮[illegible]便[illegible]持る道[illegible]国[illegible]給[illegible]僧[illegible]道[illegible]申[illegible]鳥兎[illegible]日[illegible]寅[illegible]頭[illegible]二[illegible]秘[illegible]表[illegible]神通[illegible]方便[illegible]四魔[illegible]軍[illegible]神[illegible]扶[illegible]家[illegible]傳[illegible]禅[illegible]傳[illegible]面[illegible]宮[illegible]祝[illegible]家[illegible]申[illegible]敷外[illegible]伝[illegible]言[illegible]

出でば教えわたらせ給まじき家体なれ
ばくだ一切のひとびと風の心にまかせて
寄ぎよ寄ぎよ南無阿弥陀仏唱へ給へ
行や心得べき八月十五日の夜の三時の
ほどに動じ出て八三時の内にあそび自然
仏の御入り白雲深き所へ龍躍る
まぶとどこまで輪廻の者まぶ
まるまじ だしきの心ぶ 御かく者
の二御ろくに 切くりんだしまじ
御ぎりんとまじ 釋法の
ぶ者陽の者の外よい谷の戸出れ萬の
ぶ御まるぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ
ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ御ぶ

はるべの煙朝霧も消え見えて二条の
みのりの声もこだま（さ）へ
ちりかへや月のながめに雲居
なにごころ南禅の花の
や筆よりかくも東山祇園
あさまだき籠のまだらがおがらに
地主の桜かならく色香法輪寺
の御寺まつらは水車のまた
せんきやのあまり嵯峨にも向ふて
あぶりやるごき風もうらを
まあ行よまた都みやこの轉よ
下向して奈良ひとさしても
ぞてまちかね[illegible]
旅宿り[illegible]

竹のよに重てもなおさかりたる代
しるしあれこれの心行く末もかぎりなき
ちよ君よ思ひつきせぬ恩の有てこそ
もろはまり此年月のうちそれも深
うき通ひし逢ふれまちかふ
討うきぬ行て見れば大かよく
ごま[illegible]の有てもまた親の
きもちの事も孝行絶ゆ
かの末代[illegible]けの名を末代
めでためでたき

よし野静

是ハ都道者にて候。衆會ハ[illegible]にて候
ところに[illegible]御覧あらんとするあらそ
〽 扨も都にてハ判官殿のはかり事
をば[illegible]と申候ぞ 〽 扨御一所
聞きしバ終にハ御中直りあるべき由
申候 〽 いかやうなる御事にて有
たると申候 〽 十二騎とは社承候へ
〽 十二きとはいへども一騎當千の
〽 皆十二騎とハ申せども鉾の[illegible]百騎二
百騎にもまさる[illegible]申ハ都の
そのうへ[illegible]山ぞ信じ まことにハ[illegible]
御寺も宿坊を捨[illegible]
かくと思へばかやうに申也。[illegible]

角て 〽 御たのみこそ吉野山よ
されバ申事にて[illegible]判官の
なれども[illegible]をたすけ[illegible]離れ[illegible]く
〽 備しさればこそ忠信ぞの[illegible]たが
[illegible]舞の装束[illegible]
のがれもの語り 〽 是ハ都道
我みづから法楽の舞ハ由ぞ下向道
でも見て[illegible]舞を始め給へ
〽 都の人[illegible]判官御道
[illegible]世に[illegible]人は
あるべき 〽 終にハ御中直るべ
しと思ふ[illegible]仙[illegible]悔[illegible]
ちぎり有 〽 依[illegible]や妻くも
あらせ給ふ都へ 〽 [illegible]事のび

時うたがひぬべきほどの人なれば、乃袖
をかたしきてまことに若いまさるものかな
と、ものいふ声もなくなくこの人をあや
しめくれば、もうの人とおぼしき野
の方にて、まことに、なのりうるやうなる風
の音よ、あはれ、ものをいはんとすれば
神なりて和歌まいらせ給ふ、げにいと
代をまもるかなり、まことに、彼判官が
御首をとりて、引家をとりやまひ
ひとへに忠勤を抽じて、私の意をつ
ま、人の後、申た神をあのかう
に宿りたるとぞ、静を奉れ、神は物
くるひて、我君を奇特と
いのるぞあり、抑景時が

時うたがひぬべきほどの人なれば、乃袖
をかたしきてまことに若いまさるものかな
と、ものいふ声もなくなくこの人をあや
しめくれば、もうの人とおぼしき野
の方にて、まことに、なのりうるやうなる風
の音よ、あはれ、ものをいはんとすれば
神なりて和歌まいらせ給ふ、げにいと
代をまもるかなり、まことに、彼判官が
御首をとりて、引家をとりやまひ
ひとへに忠勤を抽じて、私の意をつ
ま、人の後、申た神をあのかう
に宿りたるとぞ、静を奉れ、神は物
くるひて、我君を奇特と
いのるぞあり、抑景時が

そもそも源平合戦の時、義経の
やうに流れ水よりも速く、塩の満干
をもかへりみず、船の揺れ動くこと
順風のごとくなりしかば、義経ぞ
ひ合戦、二度の勝利、ひとへに
真あるべき頼朝の命の動きとぞ
ひき義経、頼朝の命の動きとぞ
乃西南の国々、ことごとくこれ
山に流れ、ことごとく手に
作り、神の恵みにこそ給へ
宮殿不思議なりし
まことに、影はかりの
おもて、そ
乃ん国々、ことごとく申りし

げに國より浮雲の尾さりらく忠信らうきう
びすと精兵ぞよく防矢射られ
給ふをいくさもべてふくに流徒ぞよ
むざむざと討たれ 賊や悪
才志居り賊の首揉みし む
うしと今めかしうれしく御て舞
れ面ろさて時刻をうつしてとりまね
をりわきものまで判官の武勇まさき
くよ義経とくざをこしやを剣
議せ初めの前信を背きあまりるよ
財うけて主君をいためるためが
きざうわらしてこと易くまれうり
あくしも申つきけて身成就ます
都へ帰りてこそゆるりまし

龍太鼓

是はえ九郎松浦の住人にて候さても
きかし右るひ開の清次と申す者
御存知の如く論し合せ敵とぞ討つ
候ぶ者ども斜への方にて籠者
きらくは泰衡太閤の其の方に番
まかせてと射ずやとねがいて頼み
ある 御前まで 泰衡太閤の前にて
夜間番の者かくて仕る 間もてはづら
おやまたは清次と共に籠もて破りぬけ
てあ 何と清次が既に抜するとはい
言語道断の梅社以ぶあうらかく
申付てあるにて危うき由にて有
ぞ泰衡の其の方に斯くいやみあく

作「平「妻ハなきか　ヨカン「それハ御存知
平「なうらバ悲しき事をつまてあらん人
ヨカン「是でハ　平内「科人を召出されん上ハ女迄
の御罪科をかうりて此情あるべき人
平「ふてハ柳もなかき妻の情ハしそ義を
殺すとかゝぬやら帰るべきなりき親しくハあるらぬ
妻ハ名残で荒くも申候へ　シテ「むと
より勝手にお親しくハ我等が科ハ是を
了承が作へ参りし墓所ハかくならぬ
まちほどもよ悪とも言ハすは　平「いや
只我も申て参りぬものハある所ハ先
先落居せバ何れ様の様々に読者
有とも御前でなさきと　青「いや
の世を云ふ事も又もや義あり

あやつれかしこまりし我ハ心情あり
ざる思へども殺害の科とのがれぬ所
其の程ぞ無残なるを思ひの程ぞ恐れ
去程　平内「やがてはやあらかに向け付けと
申ぞ所詮今よりハ仕ること
をかすて一時づゝ付けて参る
そん我はり人　ヨカン「けふや
おのれもさもあればいろを
ほかよそでむらくて心にあらず袖よ左ま
思ひ参らむへ今とても自ら存ずれ
ヨカン「いや上言語道断の中は女の罪あるよ
他くハ我々が大事申付けもおそ
てあぐにてや参れ義も中の女の形様
参ければ　平内「是ハ殊の外にあるこう

きし給　荒[illegible]便りや立[illegible]
[illegible]やかりて女[illegible]
[illegible]有ぞ　何故[illegible]
[illegible]人の心[illegible]風の[illegible]ずる故を
有べし況[illegible]同穴と契りし妻なれ
[illegible]道[illegible]
[illegible]の中[illegible]思ひの[illegible]
[illegible]事か　[illegible]
夫は別れし竜[illegible]の思ひ[illegible]一方[illegible]
[illegible]
何[illegible]妻の[illegible]前[illegible]やうて
呼[illegible]竜より出[illegible]
[illegible]て申しく　見れは[illegible]覚[illegible]
妻は[illegible]

妻と[illegible]其に妻[illegible]前[illegible]
[illegible]をや[illegible]
[illegible]事[illegible]竜の戸をひらき
[illegible]や見[illegible]よ　御[illegible]あら
[illegible]妻に替[illegible]
の[illegible]や見[illegible]
うや　[illegible]や我妻の[illegible]に替りた
[illegible]竜の中[illegible]や雨の[illegible]
[illegible]西楼に月落ちて花の間
[illegible]燈[illegible]
[illegible]影[illegible]
言語道断の[illegible]事[illegible]
[illegible]帰[illegible]て[illegible]へ
[illegible]に情[illegible]

[illegible]べきものなれば[illegible]ても我妻いづ
くにかやらんなど心の乱れもなくやすらかに
[illegible]柳の髪をなでる雨の風よりも
[illegible]なるかの皇女敵の行方
為よ掛きてのそ　ちきた時さう
乃ゆけてさる相浦乃敵よ　面白く
[illegible]国ゆ出たりあり水鳥よ行く
三と掛く時と寄しまもいつ[illegible]
をそてちぎ寄よ時さうしてうま
[illegible]敵者きゆ時よりあり[illegible]
くて　をそくも君が[illegible]
[illegible]敵と撞て心ゆ[illegible]
[illegible]乃ゆ[illegible]
[illegible]敵者を寄よ[illegible]

青柳の行　相浦乃うらや姫皇女英
[illegible]敵者しとしつぐ　うらくもあり
[illegible]や　敵者を時見ぐ[illegible]
[illegible]乃敵うよ[illegible]敵の[illegible]
[illegible]書をばひさに離[illegible]
[illegible]やなは
[illegible]敵は世乃中[illegible]
[illegible]独りある男[illegible]
[illegible]九つ乃[illegible]
[illegible]荒[illegible]
[illegible]歌よ立たりつ[illegible]や責て[illegible]
[illegible]二世[illegible]
[illegible]

ちりのみける籠　淵上の瀬清ハ播もが
お見付まし錦戸にて抜くゆえ早く
出候へ　安決ハ其方よりまかせて鳴候ぞ
さはなくとも淵ハ妻が方に前に
寧対まつる今まいらぬへ行てやらば
顔んいまも隠さず申たりせりつき
と弥ハ我親ぐ十三年よ爾今ハ然り
そもそもなまけ舟の
被國ぬき極楽の　松浦の門やあれとは
うゐ然りと存せしあちかの荒有るよ
乃氏菩提や極楽へ時日をたづさずく
じやし妻を尋ねつぞその　おもくに
ぬりみぞ結び契り又も清久よ松浦の
門や二世の縁ぞ有がたき心かく

錦戸

かかる横よ所者ハ奥州の住人秀衡が子
錦戸の太郎なりしが梅を頼み我経
法て不和なるによつて判官殿
ハ親の在所者を此事に是迄此下向
此間頼まれ申此度よ御運の尽きを
待ちかや親なる者空却成ても其乃
きように我々を通づき君子に心残り申
あとに思く申付金を打させそ思ひ候ども
此度遠変なく此度よい我存の申候
やん我よ君よ心残りやよし申候
目ごとに出仕申とて更よ此対面もお
しかし以上へちつく成ぬ事とね度
お頼引よう手に教書をさされよ

ぞうをあつらへ行くまで待て参働我
れも同心ぞや軍勢へ参べき支度して
作。来世よりを三男和泉の三郎まさ
ひと同道と和泉が館へ行が様まま
ゆるも孫合をやとなかいて来門
申作 [テ]雖なれ渡りなれど [ワキ]果ぬ事
なれ [テ]や此方へ出る人梅咲今の世
へ何の為なるぞ [ワキ]汝は只今まで
事なれ様へ非ず梅も我は見て出仕
やうへ更へ対面をあれ同道上へ力
及ば無ずやなれ家へ頼朝うるさい裁
きをあれ忘れまきのらずして
行れ参働我同心早れ勢へ
ぞうへ宮てゆうぼんへ何とう思うぞ

作ぞ [テ]作最て家ひひぬ我君も人
へ申あるまで一旦へ恨ずみく社
ひらあ上陸遺言のうまく同道思
[ワキ]百姓四郎へ [ワキ]ア家へ参ゆあれ
ぞあるぞ我は他へ参べ社ずの人口
もうべまで同主君へ使へ是ず何
乃苦くひつ只同心ぞとよ
[テ]いや頼朝へ乃忠義我君のしまま
ぞうべまで上へ使れまれ作ぞ君
へうをひくく敵をあを給へ陸
兄弟のたくさへ参べ一家を
恥辱へいるぞん [ワキ]梅さみとへ義
引ぞまきまき [テ]怒あるぞ力へ於て
実へ同心ぞかるぞ [ワキ]いやくは才を

言葉まことの長へたる順逆の法を
遺ひとり いやいや世をねたむる者
きべ社、親の遺言なるぬ也 まさ
何とぞ〻ぶ〻れ兄弟をバ
なぬと 信をとるべくと家きたる親の
遺言家引あらそ不考出器ふしほ
まことびや ふ者の科ハ有ぬ
兄弟の事を 家にあるこ主君
の命 其ほう親子 兄弟共
ちうの論ハ引ぬ〻ぬ
事なれば兄迄あるや今〻や兄と
思ふ弟たるべ〻ふ
と所ふを立く錦戸ハ
まとく 言葉ふの〻

却て妻ふ者と呼出し
を申ぬ〻やとも作いたに
何ぞふ〻ぞ 先世方へ
我君の所運社まよ
作 そを家君の運のもと
を行たるハ何とする
ふ〻ぞ ほんの我君ハ対面
事を錦戸兼衡ゆ念ハ思ふ兄弟
や敬とあるぬ 家まも同心きとの
まへた事にても賞ハ
頼ふれ申ハ主君ハ心を
ハ遺言有ふ事ハ失なて恥辱
ぬべ〻れば或ふ〻ハ
二君ふ仕へ 貞女両夫

此ごろをは時へ男女ふるまひやすく
よう馬乃家よりたびきりの立君な
いらで任へきと　やがて申そ。某
同心ぎりの武錦戸泰衛を会よ思
ひ見今対面みむとやかあら何た
あや。某ゆへ親乃遺言ゆえ拒よ
見を落ゆゆくまし。不覚をえ乃
も口惜きれたゆへ何方へも出ゆ久
ゆえ歌へう勝ぶるゆえ心へ中きくた
せ乃ゆてえ思ひきをゆるえ
ば身のけりり去ゆきあるをえ
しへもかくも自害よゆひんべし。
人易くは殺ト直て対死ゆきへ
会へもきをゆゆ云ゆゆりゆ自害

よゆゆ殺へ　殺りてんをそ心ゆるく
も夕日の影乃　西よ向ひく　手を
合を　仏陀佛助を給へと祈念して
く心づくも自害をと思ゆ実ゆ
を夫婦の者をそ義ゆの利。その
時腰刀を抜りて立寄。我を見ゆて
腹切へ法ゆも自害しゆへと。いへき
刀を清ゆて胸のあゆりゆ作ゆ
くうろくと倒きゆ。ゆ利ゆ和泉を
死殺ゆを付て法りゆ外乃ゆゆ者
く　藤浪のゆ利ゆ松乃捕ゆへ
嵐やうせて殺ひゆ　ゆゆ和泉
のこゆ節健ゆきけ。水へ逆横ゆ流ゆ
和か順逆二列へゆりひゆ逆ゆ。利ゆ

ゆをそゝぐ色、恨をとゞめ更に思ひべゝ[illegible]
常に股切[illegible]へ、付錦戸乃討伐をや
中くみす、荒ゞしくやいでゝ
對面やうと、初のゆをそゝて肩よりも
大太刀追取懸かゝり、大音ひなぎて
名乗をあり。君臣の二ていの義
君を重ん、親子乃孝行賢人
双れ弓を引ん、く竜角の行を
乃ゝ荒股きちゝや、今自分いや
く竜角れ問答八幡宮やみとを
や兵と、下地をくつるまつりを
ゞ強もくと面くよりひ[illegible]や堀
乃ゝめくゝ沉めつゝ[illegible]新つくきを
背よりの切きゝ。おめ[illegible]さまんて責

きりまつり、我おゝ兄弟よ[illegible]と
ゝ[illegible]ん[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

室君

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろ〳〵はなしてゆくさわぎ
安きうの事聞てゆきたべ
物ゝ
物をはなしの浦の合戦どのかうと
ゆへ〳〵門脇五郎決男能光義
経小船にまたがりおるぎ弓杖
長に立延まくかゝることなきうふ
まぞ兵をあくやうひようりで時新
中納言使者を立給ふ能光殿の振
袖をひきぶりてよきく敵ようてもあ
らばこそとのたまひきれば梅ヶ枝
きぞ大将とゝめとゝ事ゝくや有
らんとゝく敵の舟よりぞ
九郎判官を召ひまつ言ひ
きん判官の舟に乗うつりぬ

能光敵の舟にうつりぬ判
官見きとんでゆくやうかの事
きん長刀脇はさんでとつ
うの味方の舟へ二三
ひとつ教經はせんとすれども
あげきくはらんとすれ
をはしりくだりうち
きる所ゆくや義経大郎門
決郎兄弟二人の舟とわたりよせ
能光ちとぞうちきるあし
おのまきらよ。太刀もかもるまで
やいざやめとれ供はつまんと
おいあるとうしをうちとる
でうよ郷ぞだ左右の脇はさえん

て、おこの庵を出づるに、入り江に、社
人、出で来て、白波のあと
でいて、あしのもとに、あるき跡をしるく
とびまへ、ねをまれ、おもをあげ、
物語、海ぎはの、ひとりあるく
平家の、おちを思ひ、
こと、ぬるし、大ぶうしたて
さきもやとも、海あまの、流
やしぶ、ちぎれ、きびの、濱の、
とりあつ、紙じ、ちうせ、
こんぢる、紙曲、松、
ゆも、更、まぎれ、
ぎの、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いかでかの海を渡りて真言の教を聞かばやと思ひ立ちて
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊慈童

洛中の山の奥深く尋ねる時
代々の帝の御宮居
抑是は漢の皇帝
の在下也扨も汎覩南陽の酈縣
に山うるの薬の水流き出でて水上とこそ
て手まとの宜旨を蒙り唯今
山路を辿さ仮心ある山の道
もたどるとそ
草葉を
つ行べ
童子
我は周の代の慈童とは者也
扨又は行ためし深山の分
入るこそ是は漢の皇帝の在
下なる薬の水の水上を尋ねよ
の宜旨を蒙り参りたりまづ
仮周の代から百年前昔ある
事なる童子の姿こそもの成
我古へ
枕を
ども我君の御恵の菊
栄也として露潤ひ黄菊
思ひ
ふ
庭の内を入まべとうつ
我は周の代の慈童とは者也
扨又は行ためし深山の分
入るこそ是は漢の皇帝の在
下なる薬の水の水上を尋ねよ
の宜旨を蒙り参りたりまづ
仮周の代から百年前昔ある
事なる童子の姿こそもの成
我古へ
枕を
ども我君の御恵の菊

よ姫文を書くに西して結ぶぬぶれば秋汎ゐをもつて蔦の紫よ似姫文殊寫流ようり山まべ初ちちの姫や書つく。壽命をのばすのをむしび神通をひて書のをうりをくをふ知ゐまげく是あれ御枕神を結くや人びよ　これ西ぎのみなりとおのく立より花七姫文を結しなる　いびく

業樂を養しつ山まれ人び慰めと　西よ山しひてうちま移をう。昆崙山住居あひをまよかしつく仙女七歌く樂器をてしびふきびを出て雲よ新しく怨まり

ぶをまきびふ仙樂を養せび蓋童ハ立出く。業をうあづる染もを都よ面白や　茶菓の水あれびく。其ゐを暫しび百歳ぞすでよりてりや行くとびきハぎりあるじなく汎仙藥をちもんと玉出をひを立出く。藥のあ塩づら

仙人勅使よ是をちくびつ有ハ鄭縣ろ山路の菊七水ぞえや山ひ谷のひとるほきでびるめや山とびやろをとを歯をぬ。ようひとのぶぶぐたきよ

第　　　

もみぢする椎の葉の風山　西方
の深まる秋の日ぶり　朝ぶりの雲
と言ふ事　夕べ小雨ふりそそぐ　もみぢ
も草木のつまさ深き時雨　白
ふるへる落葉　指の秋の面白
白雲の　時雨しつつ　山の下
紅葉ばかりの紅葉ばかり　冷
秋の一夜　月の
月の夜　月の
行く方をつたへ
あはれ　夏の昔と
南高岡の後

優婆塞は小三蓮野三所権現が
を添へたび給へ　婆ぎや我
石根よりの雲一村殺ぎやうへ
しが谷岩に同じ鳴音き震動
石とくだくに水の流れ
殺ぎやうの中より出る鬼形
の姿面もいとぎ形でなき東方
より降三世明王　南方より軍吒利夜叉
明王　西方より大威徳明王　小方ふ
金剛夜叉明王　中央より大日大聖
不動明王　唵呼嚕呼嚕旋娑利
摩登抵婆婆呼　唵阿毘羅吽　鬼
婆呼　鬼神の通力忽ちに明王
つけぐくみ給へとんべ　ばさらさ

して、ぐるぐるとまきたれば、大地よりたちまち
に起つて、ひのもとの国を美者
と、義経よりの行者の威力、いよいよ増り
殊勝。さてくと押りて見れば、
者、義経の授心、関我名者、悪
終善。聴我説者得大智慧。智慧
者。即身成仏。即身成仏と彩雲
行者の遠方に立のあべ不思議や入道
ぐく。大勢力の鬼神とぞ、立ぶ
踊りつつ、忘我と舞ひ狂ひて、たぐ
ひなく行と見へけるが、やがて姿は雲
煙有て、姿をも煙と立消る。鬼
神のもぐらぬ失ぬ

放生門

歌ぶ

君の、四方を
祈まりきれ　杉見の鹿嶋の神職
行くの行来を見物も也。ほとこの
方都よりの合陽の寺社跡を尋
ぬるに、とは南祭の由緒、内
宿よりまた申さるやとなれば、
なる。都の山の清水、義経さ
ぞれ本宿山伏見の星も寄る鳥
羽の細道、いとこの滝のつぎ橋を
くもの、ぬ、や神ぞ、ぬ、宿出
ぬ、に、急り、急は社
よ是ぬ、や八幡の星宮、ぬ、心静
社くまやしりよまるるう

いにしへ[illegible]
むくやけ[illegible]水　山れ[illegible]
神[illegible]
人を教へ善を賞し悪を[illegible]
[illegible]
[illegible]

申す事

[illegible]

[illegible]魚[illegible]放生[illegible]放りしためもらぬ[illegible]

[illegible]方便の為[illegible]菩薩[illegible]

[illegible]

[illegible]

より一百八拾歳の世を拾く洲山小
うり拾ひ給ふ　多くの宗廟神
うく御代で守り國家をたもち
文武の道の道ひろく九重にて
八幡山神よりの名を八幡
文法仏生世の本を求ひ給ふ
あやうき道をたゞし正道をひら
人佛不二の所心をく正直にて
べかやうに行　人の國すの我ま
代の人うを我人と拾ひ世ひめ
多くの有難や神もあらさせあさ
ぎ兄弟百てをくられ給ひ
孫まであるまで行数を考へ
の神より給ふ

山のもも月ひろ月の夜平
ようひろ給ひ給ひ給ひ
あさうの町ふ代のぢくあり道所の
所の國ぢ民の海ぢ
鄙の国さ舟四海の波を考へ
神徳ひ給ひ給ひ給ひ
神の里神楽ひくきの心ひさめ
ほの里神楽ひくきの心ひさめ
水ぎ給ひ給ひ給ひ給ひ
拾ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
ぬほどひろを山ひて乃神の告や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]風の音にはきこえたれども
[illegible]の拍子
[illegible]秋の夜の月
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃家拜ぜんとうらえ[illegible]乃ゆ
[illegible]や奇ぶ[illegible]
うまや奇ぶ[illegible]行てうまん
月影の元源氏物語家　昔須
[illegible]天よ[illegible]宮
[illegible]此海よ影向有ぶ
が板よ[illegible]物語源氏乃
春のうぶまや雲ぶ[illegible]
[illegible]雲隠[illegible]　桜源氏
[illegible]大将微[illegible]
[illegible]
[illegible]

生駒をと都辛崎をうつす。[illegible]
[illegible]
[illegible]

一条大宮とかやらんに心静かに見せ
でやと思ひしが見成すべきなれば
ぶ有きぶ古宮の軒のひさし
も苔むして山ずみぬの忘
れ草。秋ふかし。寡おかり
車よ秋ふかしとうぶなこうち
入ひもうられぬ。人もとの
とよ色とある梅花の今をさかり
さんへていと立寄ぶめでやと思ひし
ちぶ。僧ハいづくと思ひて梅を
探ぶれど。不思議なれ人あり。
こゝぬやづまより女性一人出るを
我よ問ふとうきぶ。そや法宮とは
いづくぞ。ハいと梅ハいとゆかしう
事ふるぶ。まひりやぶ。そこは何
いづくより出るの人ぶ人なるぞ
是ハ和州三吉野の奥より山居を去
ふるぶ始て都よりぶ。されば
こゝ人なるまとこゝ何ぶ。
昔よりゆかしき古宮よりて大内を経
ぶ。ぶうぶる社梅と雲の人
べ。雪ぶとよ詩哥管絃の遊をも
ぶ。ぶぶめ絶をぬ花ぶ。ぶぶ
ぶとめぶ。ぶぶせよ。あ。面白
ぶ。ぶぶ。ぶる花ぶ。ぶ
ぶ。ぶる。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ人ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

名社きろまほうきれ　名所ゑすめ
べ心ちるぐ分ハ山ぐ間の弁をへて
もしゐ家ごろも色ゐうえくぐ見ハ都の
花ごろも心ととゝて　色ぬるき
清梅ぐ香ゐむりとらへべ雲の月ぐく
ぎくへぬるぎ我袖ぬるるぬれ
ど弁をぬる古文の引歌苦しゝて
首ゐしき秋ゐをべるとぬる石
の陣ゐもあるのこゝろれべ
ゐ宮ゑるきゐぬぎりやく
隔
我宮の猶見ぬれゐる
春ぬぐろんへ山のそつむを中く
ゐべぐまくや思ひまんゐりぐ
ゑハるれいくゐゐ我草の
花ゐ心をゐめ梢ゐ遊ぶゐゐ
ぬるゐれるゐしぬゐとゝ首ゐ
梅花ゐえんなるゐを秋きいゐ雲
ごとたりゐこゐ間の色ゐ。ゐまゐ井の
梅むゐ縁ゐるれゐ色　実や色ゐ
ゐこゐ花ゐゐ行ゐぐゐハぐゐ
ゐをむゐゐぶ蝶の夢ゐぐ
ゐり　ゐまハ雲景絵をへて草ゐ
花ゐゐゐぬぐごてゐとまゐてむ
ゐのゐ契りをむゐゐゐゐゐ
ぐゐ梅むゐ縁ゐるゐゐをゐぎ花
ゐへて僧ゐ会塚ゐゐゐり
ゐへゐる法ゐぐらゐ塚ゐ花ゐて
ゐゐ　ゐり傳へきく唐土の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蝶の羽ばたきとともに、ふるさとの
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

給へ。初音秋乃接松出をなく蛙を
神とも侍らんと。そもこの国に
山ほと青の神とまん拝ぞ[illegible]
うるる言葉うれ。出れ者とやくん
なとこそまてこ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一角仙人

昔インド天竺波羅奈国の帝王の
住ませる宮殿の中に池あり池の傍に
人の仙人あり鹿の胎内にやどりて出
生せり故ありて額に角ありて生
れたるゆえ一角の名あり一角
仙人とあがめられ細なる龍神と
成りてあるゆえ仙人の神通をもって
諸竜をもってこれを岩屋の内に封
じこめる間数日雨降らずして
世界を欠き給ふ故に方便を
もって婆羅門に接待せんとて
らびること義人の門前にて
ある振舞ありしにて仙人の

の岩ぬぎ人々よ心を移し[illegible]を
ものしうきの行方便よ
ひとびとをぐしたりけると彼山路に
人々山遊うしてハ雲行雲の
跡をつづる松蘿をしたかぬ振袖
の[illegible]ものうすかりや露時
雨ふる山陰を下駄まうく[illegible]
秋の月をもとめ[illegible]しるまりる振袖
雲間をもとめ雲[illegible]
ぬ山中にぬぎまつるもの踏まよう道の
向ひ[illegible]ひ[illegible]
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]

き結ぶ[illegible]庵あり若彼仙境
[illegible]
由[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白き[illegible]五行乃者へ[illegible]
行と[illegible]
[illegible]仙人[illegible]弱車[illegible]
たゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]帝都[illegible]
[illegible]
[illegible]

三笑

昔し惠遠廬山の麓に居して三十余年虎溪を出ず白蓮社を結びて十八賢有り永く教首と世に尊ぶ

ある日客を送りて虎溪を過ぎ西方を誦し

しお字を乱して此事有り遂に正に

かくて陶淵明を招く出て見れば

行住坐臥此を忘れず

庵も面にうつれり

煙霞の色うつりて瀑布も亂れ

乃白蓮の山に登たりつ

たそなりまし 雲を心にうつを

行く 雖とうぐ鳥なりこれて 俗

で遇ありとやまうらんうれ早

霜降れば曙ぶく野山の草花

紅葉ぬ枯れ葉ぬ落ちぬ

粘り付きて蔦の花ぬ

くれ年ぬ暮れぬ

こに此草庵に惠遠禪師のもと

に陶淵明陸修静居とす

長時禪師は白蓮社

書を送り淵明を招きたれば二人

ともに辞とす 廬山の月

乃橋を心生ずるの

とうを瀑布を流れ

眼てれば十二因縁心に

如来は惠遠禪師よりきれば

付属にくれぞ 梅廬山よりてば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

何のあるまじきことなれば、男「はんぐわんにはい
秋の比下向申べきなり」
女「いかに花ちるぞ秋ちる作所
男「まづ唯今とまる事仏恩なり
ちるは浦年なれば船よりは鳥
おかまをもつかまるこは花弟殿
出つつくをあつく所あるべく
うだ抜の事申さむ為よしそうて
仏「何と花ちるは田づられる所あるを
やう花ちるいとまあるべきを
射が為よる主あるいなさるべう
島へあぐ申べかりける花図射狂
情なき者去れ男「何とを射へ
情なき者と行ぐれば心とまづあて

ゆゆしき名を作へべりを家をまぐく申
ゐ五十日百ゐ五一年重年をそ
は留寺とはやをどもでふけ
重技持ゆゆ花図射が情なき去
みぐゐ五年家物ゐ去ゐ五年
しみて狂ゐ花ゐ殿ゐ去ゐ
作道ゐ山屋をあらく行方へを
ゆゆ作へ「ゆゆ」やゐ明ゆゆ
花ゐゐるゐ是いけなくゐへべ
つゐゐ鳥をおいんべ「男」それ
男もゐゐゐへ花ゐゐの所
事は行きなきゆゆ所へ
ぐゐ作ゐゐゐ蔵の
ゐゐゐゐゐゐゐ作ゐは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そうぐ松尾よりの鳥とかやうの
我らは心うき鳥の下やとうの思ひの
枝むきかうをさそうらくびを捨
舟よ鶯鳥をうら　あうひは水田
庵うを作り　みるは小舟よるこを
うを　ひうつく濃の舟の庵塩よ　鳥を
ねうつく言の世よ　はうぐわの私
ぐつなむ京や言の世のぐうう
さとへよりぐうぐ
水鳥のうさ鶯宮めぬ浪枕ぐち
ちびく私の田のぼるうさよ
三面白の鳥若は情やぐうる
私雨はなうぐさよ

舟の移て我らを年よ一妻あり
もや世とあるの月ぐのうう
頼うりひく　問るるくも厩ここの
私の法下に給ぐるぐやつれ
ぐそれやそ成のうし打るあま
ぐなくくもそのうあだ若ぐ
果報のうるうて志作べ
うや蘆花心あり人心あり
うう物語のうひ世界こと
なうぐ牡京しうとを危迫射
情ある去あるぐうぐもくぐ
母よ　よるひとうき申事うを
あれ文ばよりうを諸作
や　うを物語のうを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いかゝあらん坂乃ぼつけ鳥の別れ[illegible]
敵討ならつまて打をいざやおかつよ

男門　あらうれしやかうの墓が田乃鳥を
皆さまて久ぞく御待ゝ人　引き
舟よ漕め入くゝ古くよりなるべきことを
目もわくゝ舟ゝをおかつ中
ゝ鶏報となることをかざたる舟
面白ふ作洗舟を迎ひ出ゝ中
あいかにあわまつ[illegible]なることかざたる
舟を迎うをよ　男　あらうきやば
かうよをいて尼迎討が舟あれよを
なくいぐまる者そ思をとうら[illegible]
様今ゝくかうまふ天時あかるれ
者うか　女　乃舟うきとうら

男　是ハ申ゝ不審也とて漕うゝ
鳥迎舟ゝ迎ひ出て結ゝくゝ
紀伊ゝ殿うて[illegible]
[illegible]ハ尼迎討あれなんぢゝよみて
[illegible]

女　いや是ハ日ゝ殿なゝ
[illegible]ゝなるゝ母ゝ母ゝ　[illegible]ん母
[illegible]ゝ入作　女　それハ行とゝ賜
きをゝ[illegible]ゝ　[illegible]ゝ牡京と
ゝまふ[illegible]ゝ作ゝ[illegible]ゝ頼ゝ[illegible]尼迎
討洗舟乃出ゝ者ゝ[illegible]ゝ
ゝ親ゝ[illegible]ゝ我屋[illegible]
ゝ[illegible]ゝ乃ゝ[illegible]ゝ
捨舟よ鶏報ゝ[illegible]ゝ
干乃浪[illegible]ゝ[illegible]ゝ

第四

[illegible]道乃乃事ぞれ弓取れよハ
胎内ゆて[illegible]ぞとをきぐゼ業ゆく
[illegible]のかきとうと[illegible]ぞれ[illegible]
[illegible]よあまりぞうを会よるうんお
唯[illegible]と申を業が[illegible]仕業故
なれべ[illegible]面目ようこう作へ唯
今危迫射を射くまてうぞるて[illegible]
ぞこうへ[illegible]作へいに危迫射の
きいうくちんなら去ぞうぞをれ
とよ付ちくしへぞそ[illegible]
作方国よりあるべのあるの恩賞
をしるぐ都ゆてう地乃甲斐も
ちくぞうを主をあつ作ぞてぞへよ
作ぞを[illegible]ぐくゆをべへ

なねそ[illegible]ゆをと乃器もちくを[illegible]唯
久ぐよ捨をきのそる[illegible]ぞ乃父乃器
ぞとよあやまつ[illegible]仙都よ入てぞ[illegible]
れ客をうとりへだ[illegible]ぞ作ぞ
ぐうぞ[illegible]の孫よあつれとうう家り
てへとよ況ナ紀年月日あつ[illegible]く
てぞ[illegible]ぞ作へ
不律あり[illegible]只ぐうぐ[illegible]の[illegible]を
我ぐ中ぞ[illegible]危迫射ぞ月八器と親ぞよ
兎[illegible]を[illegible]と名あ[illegible]侍
[illegible]迫乃ぞ田ちも私ぞねちやくゆる[illegible]
危迫射ぞ[illegible]ぞ[illegible]家と[illegible]
様ぞ[illegible]里よ隠ぞ[illegible]ぞ[illegible]
取ぞ[illegible]

次オニ山ノ神ノ宮ヲ遥ニ望ミ鶴崎の橋ヲ出ツレバ是ハ都方より出ツル船ノ
ヲ[illegible]狂ヒ[illegible]の國ニ作リテ
家ニ[illegible]の名所ヲ見付ケシ[illegible]是
ハ善光寺ヘ参ラ[illegible]ヤト思ヒ作
雪ノ白山ヲ長閑ニ[illegible]
[illegible]長ノ江の里もこれ[illegible]
[illegible]
[illegible]多胡の浦ヲ見ツ[illegible]
是ハ[illegible]多胡の浦ヲ[illegible]
[illegible]作リ[illegible]
[illegible]

て作リ立寄見ベシ[illegible]面白ク咲ケ
リ[illegible]ノ[illegible]浪ノ[illegible]
[illegible]咲ク多胡の[illegible]
の思ヒ出レテ作リ[illegible]
橋ノ[illegible]事の作
[illegible]方ノ事
[illegible]ノ[illegible]
の浦ヲ[illegible]
多胡ノ浦ヤ行ノ[illegible]
浪の[illegible]
[illegible]
[illegible]

同じ其人染の吉風も恨まるしびやうらめしや彼縄麻呂の母よ
多胡の浦底ひ合の袖浪とく
かざしてあり無の人の為と詠ち
供花を忘るく緑の恨や
笑ひ思へる笑花の色を香を去
人で去れと詠しを知りやく
きや扨もかくそうりそ白絹の袖
を濡り給ふ詠やん　我を訪
とう夕日寄沙白の花かつ心よりて
きびはへ　うろよ通て思へと指
よかるふ義浪ろ　多胡の浦廻ふ
名ふ　あ花の精ありやう夕雲ろ
見くやうる多胡のうら風ふ　あびは

花の浪立りやそよ　ふ
はきりく　震ふ月い出くも
うたむろく　ようべりあるうかき島
鳴ふ法の声うて花の
雲の風声ふとて浪れうり
今やうあ　しうれ
べむう　きやそよ数花ふ
色よ迷ひうめ　ふ思俳おお
そよ月影ふ彩き出る姿と
花ふ　ふ女人のうはを
特鏡ふ有もく花ろ精ふて
しうり　和　まうら花の精好成
唐法の一味ふ開ふ花の笑
まはを題き出てうり　あら

方経や去ぬ。ぐ。ぐ。ぐ。くしを詞をとり物
すゞ何の故ぞ。ぞやん　異性
化者自在不滅の縁よひうきて絶
疑哉哉とぞ。ぞ。ぞ。ぞとまりたり
こゝやえ業相言待語も　こゝ仏業
の因縁　ゆゑてゆゑ　紫の
ゆゑとの色を色んあ。ゆ。ゆ。ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水無月稜

昨日は下京邊より住居する者なれば
我れらの細葛にて播磨の國より
くべき室の津より逗留の間相
知りて世話をなすべきものなれば
ぐるべし逗留をあんじ
聞く契約申てはいまだ洗ほど
室の津へ迎をつかはしは家に
世話なる由にて同じ今八月ぬけ
中ともなるべし又ちかく越の
稜なり昨日明神より
仮逗留をも願ひ申とあり
昨日は洗ひ方住居する者なれば
今日は水無月稜なるべし

まつりやとあり
紀へ使に書を遣はせ申べし
内かたは都の人なるべきなれば
不届なるやうに伝よ
都に者なれば
田舎に
洗ひ方やとよめる
弘しき事なれ
ひろきやとよめる
き事も多くは
来て面白きものに
若き女なれ
やうに稜なく水無月稜の

輪をもちぶくろ小菊の露の謂を申
てくらまれつ見物もおくれを
ろう菊遊ひ見物を見せ申べ
ちらべ其お狂を見うずるて仕
行かと知らてしまりに行よりや
紀へ奉てば論ひへ好み群集
きくに似お狂を待くれやへ
行水小狂かくようもうれきい
男女人と男女業乃跡とをひく
つまうせ乃ばさい流まや中賀
業乃御手洗乃よりの君とあ
名都の秘して此御都ちせ行へ
さよ[illegible]やへ人をうれをつ彼の
本綿をくかくるをきり
[illegible]と

神なるべ　おとう遊頼れお
又[illegible]き　空やのもあるれ分ま
たくへ人い狂原乃跡い昔よ業平
乃洗河ちなを戀をしとのきり乃
うきも大ぬ乃ひくてあまの
人心頼ひかひちさか行をうれとい
思へる我なうき行よあうひ乃
島乃　[illegible]の行業に戀しく
遊瀬てけや行うし　夏や秋
行よ空乃通路かくかく涼ま
乃う波行手流乃ハ潟とるけとみく
まひ喫煙乃文樂ひ紀の行をうべ
頼を知てうきの人よあうり遊つよ
中車乃かを知しの行ホよ美よをうく

[illegible]ハ母[illegible]の詞を掛輪の
謂とし[illegible]
[illegible]詞とかきて謂とまちまちも
思ひ[illegible]
[illegible]輪と持[illegible]
[illegible]の後の謂
[illegible]
[illegible]の謂[illegible]
[illegible]語[illegible]
天照太神皇孫[illegible]の中津
國の神主[illegible]
に[illegible]振神ハ[illegible]
[illegible]と事代主の神[illegible]
[illegible]目の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
夏の蠅の[illegible]
[illegible]神[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]輪[illegible]
[illegible]五
[illegible]雲[illegible]
時[illegible]水[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]輪[illegible]
[illegible]月の輪の謂[illegible]
[illegible]

稜ひのきくまざくしより稜の
きてまざくしの輪ちりかへや此
輪ちへはせ給へやうとくく宮ぞ
賀茂の宮くよりまゐせ給ふ稜
けの浪ふるとも此輪をもて鎮く
を清めあるまゐせ草振神はいかの
も此所をしもときこ聞の
道を書てまゐ事いあるともと
方な通ひ給ひ今日八幡の輪
をもてしまり給へやまゐ
二ぢの奏年のりて雲ゐ
夕音の神代今の世行あく
きよへおりれ稜ひおでめ志ぢて
ぞ清声出稜けの浪の白和幣

麻の紫の青和幣ア身も清
拝良の身を清め心をくまなく
所すまていざや神おまゐん此
賀茂のかいをよ多賀へいたよ
ひをぼをめうれくく面白う奉
て御入せ給ふとへどの時前
うく仕 今や陰時の まつりよ
がざしの花をたまゐるとやけうを
ぢぼをとうきつく秋の御前よ
ろ風まゐ賀茂けの夜瀬志ぢ
ようのちもあるいもよ秋よ
入ゐあひたと内い物る強ひ
をたのそーや 三月のあさ此神
の心ぢれや賀茂の行 と此水よ

歌をうたひ、海のれ神くらをうたひ、
手三
心と相の手向やさ　去うくもよ
そよハ行とがそでぶ　清水抜け
ぶと緑れ山陰ハ　賀茂の名居
ハ　清まりや　乱の秋ぶ　家建ハ
みーしうしあうしんぞうのうう
浪ハうーしやもうねも屑もしき
髪れ吹茂の　社へすごくしぶを
よくハ水のあや呂服鳥くまくと
御ものてぶ立居さる　みすぎや
梅ろわうきう　具書ぶとのひと
久て喜ろ分ぶ痛しぶ
きハそのくと牡くと弥ぶう現

あきの分ハ心ぶだぶ多ぶ　も男ひ
かぶ腹ぶうぶぶかりあと
立神埴ぶ蒲あぶ
ぶや男くを歌頼む恵普きむろの
と　立神埴ぶ蒲あぶ
晋ぶ　吹茂の宮居　ぶ神ぶ霊
や拾言ハ同じぶ　ぶ宮ぶハ操
をぶも　ぶ紀の神ハ伝恵
ありとぶぶくぶきひ
て時晋ぶうまぶくと

寄占

宮ヶ瀬路の白山ハ、夏陰いと深く、
[illegible]
麓に住居する老みゝ相模山行いとく
の老たる男神子の祭りゆゑ弓ふ
弦冊を付て寄占祭り仕ふ。きつゝ
[illegible]
由を問ふ。出占をひゞ
やと答へいふ。海り仕ふ。寄占の仕方望
みくゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゑまうりかれかふ白髪を頭てゆ見も祢の
ゆ器と為ゆ新ふゆ国年げに沖ゆ見と者を
おこうり祢ゆて仮 拙ゆを猶ゆうゆ
ゑゆ舟占をゆゆべ 安紀宮の力一番
ゆ手ふ南りうる短冊ゆ舟を遊ゆ見を考
へて手をゆべ 家ゆ数へゆ仮を短冊を
ゑ上ゆ見ゆ見ゆ舟ゆ何ゆゆふゆ貴ゆ南ゆあ祢
く東白西ゆれゆる舟ゆ深ゆの山ゆ拙
ゆ見へて ゆ須泳山を読ゆ見ゆ
ゆゆ見ゆゆ力を考ゆ ゆゆ
親ゆゆ去ゆ狂可労仕りゆ間生ゆ
のゆりゆと者ゆ仮 心ゆゆゆ兼ゆ
ゆゆゆゆゆ。失今夜の可労を
尋ゆゆ。遍遍一遍ゆゆゆゆゆゆ

水ゆ金二ゆゆの童謡ゆ題ゆゆゆゆに
泳ゆ金稲ゆゆ長ゆゆゆゆ十六
万由旬ゆ焼ゆ四州常楽の波ゆ
ゆゆ。金銀珊瑚瑠璃玻瓈ゆゆゆ
新五重色空玉雲ゆ移ゆゆゆゆ須
泳ゆゆぎゆゆゆゆ。南膳部州
の草木みゆりありといへり拙ゆを南ゆ
青ゆとゆ結ゆゆゆ空ゆゆゆゆ恩のゆ
きゆゆ高ゆ千丈の雲もゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ父ゆ山深ゆゆゆゆ風病の身色
ゆゆゆゆ生老病死ゆ次ゆゆゆゆゆゆ西
ゆゆゆゆゆゆ

とうたゐ色どりあく。文字よゐ義
命路せようぐ。ゑ命のこちや。去を
きべ流よ命期のみちあきだ。又得
ゑ知衆して。二度家ふ換生の者
命が極と成べき。奇占の宮ゆ。
しるを思石きゆべ。岩蛙。や法ハ告
しるまりく仮う中りくの力心易
々思石きく。也比祝ゑ考て仮まる
見成初き人を占の不望ふ。扨
おとも占の可望ふ。が以前のめく一
番よりみ通りき。ゑ変舞の奇を
ようく。賞のういこの中が時る。去
中が父よ仮く去ゑ父よ仮ど。見る
父の事を仮ゑ。ぢんが父を失

ひて義申仮。見ハ早ゆ仮ゑる占
ゑ。ゑを。いやゆゑべ社寿ゆ。
去をて占よ偽りをあ。賞
みが言葉の縁ゆ。ゑいこの中の
ゑ親ゆ。ゑ時を知ば社時もゑい
よゆひ。や。ゑ帰ハ時るゑ。か
ぢんが子親ゆて。面白しく
雷面喰舌の驚り。賞のゑハよ成
きりく。不思議や。ゆ才るいびくの
人ぞ。伊勢の国の去。社可る
二見浦。父の名ゑハ。二見の去
吏宿舎の何某。佐真父ハ。別
てと年八拾年。扨おゑとのみ者
久る。幸菊丸と申せ。ゆ。

神の川合きの是社の何某よ
姫きやくまし海とかやいん
とまでは白髪の面
ちまし　それたまは我の　みは
みあり　郭公の　程なく今
そめぐりあひ　古もあひ親や
みき　二見のうらめ　ものやる
かきそ　やや君ぐもむ　鶴の白山
さ　ねども　ぬりみ　行法とて
四島の別まし親　みみ二度逢ぞ　不
思議あれ　あ　ぎ成り
社　佐ばみ息ぐ　えん
仏数　あき我　是も神の
合　あ行ふ　仏作法

きうどうう　辺比目出度ぞ
みて仏あれ　人の中　地獄
のみ様　世界　作りて
ある由　なく世の事　作
ぎと　姫　ぎうみ　の
一曲　言　神　ぎそ
つ　成　ぎ　海
きき　面　の一曲　ぎ
ぎ　月　の
雲　の世　
明　徒　
あん　世界の虎の巻　月　鉄
し　雲　島　島　
ま　甘　

の齢を経ること万々八千皆空しく何ぞ
が幸位の男則ちなるべし　命の水
上れば池に随て拘めらるるなり
魂は籠中の鳥の用らを待ちて去
よみがへり消るものは二度人間に
生れ変て来る　須臾の生
滅　刹那の離散とうめきぶ
歌迦大師の怒を蒙て敬を
忘れ閻魔法王の責の
苦を受ぶ名利の為を捨まいまじ
くうして煙をまぬれども安さ
を悩まるべう黄泉の責に随
ざるべからず地獄の苦もまたいく
ばくの時か過去を

前世たるべいまり物目をさいぐ
住るかと思へば蒼皮忽ちに拘
拘て故人とおぼえまじ親族多く
集まれぬ時うたり中言べうあ
ぞ
ぞうたんやくとうたり我が
仏の幸の時　三界を安猶炎
宅天仙なるべ元吉の分あり
やはり貧賤の人はよかりて
どう其罪のうんぬよくしひ
うのうの孫業よ
をもい地獄のくしひ
ものとき
一日もうの方元萬年
地獄の苦しひ
前世の樹

どれば百番きいてくれば見よ刀山劔
時いまむしゆ去よぎいとやせ紀字
地獄去ひ者ひ也やうづの大石
ろくけ羅人をくぐ次の火盆地獄
ゆうくぶ火炎ゆいきぐまくいろ
骨ろうのえくたる火を出ぶ頭時ハ
焦熱大焦熱ろ焔よむまび或時ハ紅蓮
大紅蓮去氷よらるぬき鉄杖ろく
ゆくぶ火爆究ろとやく創て
鉄丸をの渇てハ鉗けゆ飲ろや
地獄むろいる五量なり餓鬼去
苦ひいそ生遍ぬり畜生俵ろの去
しも神ゆいてまろぶぎ身より
出き科きれハ心の果ろ科責て

かゆ抜よ去ゆ人ろ也月ゆ名ろ浮雲
ハ後の世去ほひ去ぶ　なの世
寄とハゆと思ま人重胸ろ鏡よ心
みろしまく　景うまーやゆ人
アてゆよ見狂ハあぶやゆ去ゆそ恵
出しやあらうあぶや　ぎゆむ
般人ろ神ゆとく面色変アかとう
つゆきをゆ屋　血涙ゆろ寺
ゆく　白髪ゆ乱きさろゆろ　言
ゆろきるゆくゆく　天よさきび
地みたをきて　結かこゆの
ぐゆ時ろ卯ろ泥ぶの血月雨
もうやとろアぶ面よハ白ゆをゆて
鉄よハ露ろ去ゆ時ゆ泥ゆれ

ちまたに見かへるとかやうとかいふの葉さま
く指てかすかに窓のあなたにひるめ
き高く岳つ所臨をとぶつる神のおと
きりゆとしてみえたるかの神のあぐ世
なるねとてぞうぐくとおしけりつゝぶ
神よりもつまてぞふ伊勢路の古
よまつもゆりあべ二見の浦やみもつ
ぎ二見の海子島をうぐく伊勢名
國へぞうりをなく

雨月

ぞたにこゝ
ふ心とさそふ雲水のぐく行はやいづ
かりこゝ
見ぬる時ぞ奥よ伊勢
西行法師のゝ我宿ぞのゝ細あ
かりとと伊吉の明ぶよ桑名は伊
伊勢の野の奥ぞ高くぐく
西のあの秋のうら月てゆくこの
ちぐべかて鈴鹿の西津の浦づたぬ
ぬ磯ぞうちやの伊勢の海よ
ちりく憂ふ行よ見いとや伊
に見てぶ我潮よ変り変りことを
さもうひありきぬ頼ぞや日のき
て伊勢よりきをぶべば鈴殿の島う
とうくて火れぞうの乃ぶて伊

ほどなく寺宿をやとはせ行く
風枯木を吹く晴天の雨月不明
照きび夏の末霜ふれるあるに秋
乃宮殿より堤の半月蒹葭白の
物うらやまし　いつに世屋のうら寂
申行　沼をこぎ行くに　行雲
たる僧ぞ　一夜の宿をば借
ぬ　舟よりあがりき柴の庵
ゆく　旅よお宿の門をまどかなる
老さきへ　ねんごろ　ねんごろ
世を捨て痛わりきれいつそ
去なず　ゆくもおれば去帰れり
ぬ　とる思ひ雨とも　思ひ
うぐいすの　行増乃　ふるいぬ

よりてとどまり給へ　梅の雨月の
ゆくとあるそこ心ぬ　ぬいつき
ぞ雨ふりて　うぐいす　八月
でく枝間をとと行をうぐ
須天の秋乃ゆく時　ゆく乃ゆく遠
あるとも者ゆくとて行増ゆく
て八月　影　ゆくる村雨　宮の
月住居とも　賜ぬ行増をゆき
ぞ行ゆく賜ぬのきぬて　草ぞ
ぬ面白や　月寺乃下の白あり　此上
乃白をつぎ　ゆくお宿を行く申
侍　ゆく秋　和寺乃心を　ゆく
をあれ出る　ぬ八漏　ゆくたまれ　春
よ　角に　賜ぬ行増をゆきぞ

月八偏雨ふたがれとやうにくよ時分
端と葺そけづる　面白ことの
ゆやぐこ理りそまを夜の月を
思り雨をりへいとをあくまをばこの
へつまをるやう物しを秋なるく
ご五あるの乃新月のご千里玄鈴色
を心まをるく秋の空雨八よ潯湘の
あのあれて思ふく　初村さめ
ゆ久初雨の風ゆるやとを
里小路の嵐やら　紙くきけば時
雨るらで空ふまを秋の物　行燈
の松よ　夜あるやや雨ふくる
ありきらすあのあらしの吹音く
中くを八まんの可のるあ

月をまんあるきけとうく国の
端の松の風ばいとをうの月浅
をほとゆ俊寝の夏をめのまう
ゆ　とうをを接枕ををの宴へよ
をあるいざく寝るよ行ぎく
寝るよ毎のわとを時の
風をるく哀搭の為なを
あで秋の入るをのり夜月八か
てるよ財前ゆ長を時
あとあ水の空の雨の白を行よ春の
波をとるを心をめて多くの
水玄空哀の秋の露をやす
月ぎて空ねてまをまら空
をあまあるりひの秋をを

の業とうた集め、雨乃名殘と思ふ山
もやゝ夜ふかしの撥べを御供えく
家へ元敦所うらがくを津守乃小舟
なれば拂も養乃浦のうらかぜ
よかぞる古へを松ぐね拔して
けやまどろむ山あらしに
詠吟やる陰陽二所共貴
そ乃白をかの名所を
金水ありゞ下へ則天地へ
見詠ぶるべ我てべ
思ひ
ぶ
ぶ
ぶ

その風ひとしかりけり是也ありや
今ようやうのかぐらの神宅にてを
ぐらとゆうてでの神はあらせられ
きれいどもの官べとなりて宅よ
帰りとりやうとれかりてくりき楽

第十六段

浮世をいとはぬ者はなくて捨てく
や規ちる花　加様成者は深草
乃少将なるべき事なれども書よ
おくるまじ世あらじきなくかりの
行よ一言を捨てやの法と成て我
世に有し時より善光寺へ参詣
てば行法国よりぐをくよ所
堂へまでやと思ひ　しにあるを
道行人に善光寺へ道教へて
行の程にやうやうにまぐめ
お付くいれば情ある人にまれく
を御あり仏如ト思よ所の
君ようしかるべきを失ひ

たとえ言葉ばかりあれいとてさびえ
言葉ばかりなるよりはよりやくた
様よりおくさまのうちのはけうら
してはかせ申さんとて いとめの
ことうの日のうちくはいとうのごとく
言葉いとおかやたあらはいづくとも法
よびえはにをとしまち折ふ痛み
やうくへの弱しよ屬車にはまり
ものをを高うもし日もはよりも
こしけ出の車しうくたうの郎
法佛会扇を蒙主不会仏をあて
せよの出車くく先ゐ雨のう
きこと次ゐくせこうの出車くめ
ゐやあれうさこと見い都けは

らう深草の者くくがはりけるとを
うりけ法国をはりは　やうきゐ
やまをこと弟けせのあるはの人より隠
たうのうまれたゐ　ゐうの母いとゐ
はのうるはえりへいくほどけく思ひ家
をはへたはいはるゐ白雪のあと
と言くゐはうなれやいう
へうはは島酒喜よまとゐきはゐけ
はしくはのはけくはまくゐりは
たはのうゐ露の命と縁とは　はは
はの申ばとうは神をしうをあとを
心とへのあれまはくゐ　尋うえけ
はけ教くたはとはへはいうの
うこうはとはは思はあうきうゐ様をは

法國よりのそたる吉元寺にて法華
ゆきしく いつに見成狂人面白
狂ひ人へ いやいやいろいろもあるが
狂ひ人はなるとかなるとかあるが
狂ひ人と申とばかりにて
みな人へ いやく狂ひまで 狂ひ
狂ひきうが法華きうとかとかの物
狂ひ人まきまきまきまきまきば
ハけまきまきまきまきまきば
ハけまきまきまきまきまきば
ハけま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やと思りけ　今にくまれけるも仏
ゆの心ざしば行住坐臥に仏申すべし
ぞりた吾光寺さてい書は逢ひ
きもまもるとゆくもべうは早果も
退転はくいと青は如来は行あり
て行心数よ人会ひて申仏へ
きけへ行住坐臥　上人記二　大まに輪
心の根元と言ふ相執悪
会うれ　とのれと心よ
おく流特無常かして車に廻り
ぬるぞ　流転不定よりて島
のもやうあるべし
悲しや那や神しい人界よ
学とへ云ふ見仏聞法の結縁

をもおさ身しば未来に楽しもいう
ぬと思ふ　凡は法の出
死よ　破戒罪根をもてはず　一会
十会の間よ彼国よ人とぞ
五劫思惟のはかりさ
うう病極重悪人無他方便唯称
阿弥陀仏極楽とぞ
う信じて神ぞ　れ
数く　思ひ切る事なまじ二人
当ぞ　ぬ
立ち　れ
ぞ　ぬ
て　ぬ
人　ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てん いうに訳なたる 上に所のく 山伏
迎いくたりとぞ者ぞ 十二人ぞ
ゐる みそ出く対面申の様
見成ざるさいくたりは身ゐく
濃りぞ是は伊藤次信がみそい
徒次信殿へ所内よりゐる 判官殿
入は信殿へ場の入ゐ様よりゐく伏
ゐくけ持侍はめ成入れ御金ゐ
拵 判官殿十二人の山伏ゐり
奥へ御下りの由承て祖母ゐて
長此持侍ともゐくはんとをかゐ
ゐ十二人御入へゐ 判官殿
ゐくは席ゐくは 移へゐ 陳息
ゐゐゐ所内へ入

伏へばゐくゐ御だるゐて伏 忠
ゐゐ席を賛れ者この中より
ちまゐとゐくゐと者 判官是
ゐゐくゐ 伏御下ゐ
ゐで 山伏中へゐり出る者ゐ
十二人御 ゐ まゐく 日星を
出 鶴ゐ 拵ゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

山伏者ども大事よて仕べき旨の人乃
聲うと打べき旨云ふ者ども拝みて
仏ども物に付き祈祷仕り物と物と
敷ども行ひて山伏の人乃目を西塔
山伏ども申すべきなり山伏の人
三塔一の勇僧べきなり君乃一人
童子ども申すなり　武士ども乃
衆ども申すべきなり山伏の
僧ども申すべきなり山伏の
僧ども申すべきなり山伏の
人乃目をしずき君乃人めを
しびあるべきなり かく仕りなんべ
ば乃ども申すべきなり
早速日吉へ入べ　増ば城次信の
るべ判官殿と仰ぎ申すなり

人乃引き給ひて仕りて十二人乃山
伏乃僧ども乃目を見て
申すなり　依て申すべきと
仕れば仕るべ　仕べ
申べ　武者乃
出て　義経乃
膝に懸る　梅酒
自乃　城次信乃
人乃目を見て
申べ　申べ
申べ　申べ
申べ　申べ
申べ　申べ
申べ　申べ

しまつとおもひてよだの事こそ思
ひ出るなれ　いつた
上は決信が心ばせをくれ殿なり有れば
聞るりも申まの不肖なれども心ばせ
きこえたる所にて所詮家こそ仕
る辨まる　所詮　決信が心ばせをくれ
家なの横ぢくりを語つる者居なり
きえ　最て所詮とあらとしれ窓
よ語つる者を申りぐ所詮なるまと
ア山へ　拙て八幡八合戦ぐ合ると
ハらこそ　陽厳のご二男能登守教経
かくれ　京つ船よりを乗渡りぐ
漕うせぐ　源氏の方将源九郎義経よ
矢一筋まの者を奉信てハらとの者る

ぬ申ぬ　とおもてぐ皆御矢面よた
ちまきぐ　ぬ申ぐ　ぬ申ぐ　ぬ申ぐ
ぬ決信を心ばせりれ間八合ぐ馬
八前よりを寒ぬ義経見ぐ有や
ぐくの剣ぐ知らぐ　ぐ八たりぐて
其時ぐ教経八寄ぐ　きたぐ
矢坪ぐ　ぐて　ぐ　ぐ
たど決信ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぬ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

[illegible]次信と陣入りしものよかりをびるよ
次信いかにくるしうはなかりしぞとのたまひて
うちかたぶく紙よりそうもおりぬぼ〜面
目をたちまの勢ひをつく　梶を附て義経
忠信はいかにもかりしまるとう　へあ〜愚や
忠信は日ごろよりよりく陰きまり所
けりど舟賀殿の御前とのもの次信が首
を自然ばの方よりも渡して忠信はいく
まの内の矢ぶ箱玉ぶ箱の中カ射尽さしおりの
やまうべの敵舟ぶうの敵でいかに蓮
がうぶ舟ぶ乗ぶ遣の船よ投入ぶ
ぶどもく舟をしかりく服前兄
の敵とぶ義経忠信と敵をうくいく人
物を敵と大将よ申ぶ

次信の妻の秘蔵よりぶ
[illegible]人うまぶ平家の舟のうち
[illegible]の陸の陣
[illegible]主従
[illegible]人寄の歌をかきれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

やうく寿ぬるよ次位を財よ貴
人たり申やうく久らあるの御助
替りにそうず二世人うあるやう二世人御助
恩をとり報謝とぞ命ぞれうさ身
さて露塵行情ぞうさ舊郷よ
ば昔よ人毎十よ物ぞうさ
事れ不便りて。もし心よりも雲人郷よ
あ所ってそうり国くめぞくば葉まを
ぬくく絶よしうくめよきうし拠
よ命ぞうさうさ月ぞうさ手ぞ
忠勤まくと量くぞ丹よ位ぞ世
出くく次信出位ぞ孫を書れ出て命
人恩を報ぞくと思り事も宮く
拝りへうれ姿ぞうさ人だよ公来

えぞうさ月景ぞ悲きう母れ
よ堪ぞ思ぞ有人朋
者盃ぞ出御れよ和まぞれ
ぎれやうれぞくて去れ人情の至
を用ぞ命てう 稽者れよ
ぞうれ別ぞ人御あて給
ばとれ思りあて十二人人出伏の孫
長人れと知まれ人ぞうれぞで
進ぞ男めうれれぞよれとぞやぞ
ぞよ名まよはのくと行
ぞく暁申てうばてうや山宿を五
出ういう誰あうるよ鞍ぞぞう
ぞくまれよ君人御侍申うど
れよぞ侍ぞ行ぞで君人

御供申てゝ親の敵のもとへ参きれ
うれしう矢入はげまし給へ
乃山伏道に行のかさ笠めしべきぞ
[illegible]乃あるべき思召出さるゝ[illegible]頭巾
藤袋とどめ[illegible]掛てたび給へ山伏道
乃御供を奉　糸慶波を押へ乃
ぐに申りん鶴丸殿ぎと御供有た
[illegible]道具を掛給へ[illegible]
[illegible]まるべ[illegible]中くま
[illegible]掛[illegible]
[illegible]
[illegible]

國栖

思ひいでぬ雲井を出でし雲なれど夜の月は都忘れぬ

たづねくる山のかげ〻ぬるめやど頼めし神風や五十鈴の古跡まもる

あるじ清き水ぞ流れ君と申し御ぶつとして天津乙女をとうるべき所よ御伽あるべしの連歌をそなへ給ひ都のちなみを遠田舎なれども山野荒れ果て露分る道の果まぐも行幸や思へば頼りや夕を秋山や世の平れ行多のたうもべ金所すれく

男廉ふたちの雲日山ぬく〻二笠でまちる雲雨れ金ハ〻ぬ〻そ吉野下ハ〻やちぐ〻社義雲あ春の夜の月雲井よりるべ頼うとうゆよ玉れ〻〻〻程よいづくたちぬ山中ふ花ふ春てふ。ど社所よ花をちさきぬ〻ふてふ

祖母や兄給へ行ぬ〻ひそ

あれ祖父ぬを屋ろうふ

雲やれ社まるひ日ちをたぬまれ給ふたろ

ろ〻ちろふ雲社れ

びさだぬるぬそれ氣多あ

あふちぬ氣多ぬよ昔より

天よろば住所よ社雲ハ雲ハと